

香港教育大学

香港言語・文学文化国際シンポジウム：
日本と香港



香港教育大學

The Education University
of Hong Kong

開催日：2021年5月21日

時間：08:30-16:00

オンライン開催

開催者：
香港教育大学人文学院
香港教育大学中国文学文化研究センター



FACULTY OF
HUMANITIES | 學人
院文
人能弘道 Humanity can broaden the Way

中國教育文化研究中心

谷明月博士

香港教育大学人文学院・副院長

ご挨拶

おはようございます。講演者の皆様、同僚の皆様、そして聴衆の皆様、ようこそお越しくださいました。香港教育大学人文学院を代表してご挨拶申し上げます。この度は、「香港言語と文学文化国際シンポジウム：日本と香港」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

まず、このイベントを開催してくださった中国文学文化研究センターに感謝します。コロナ禍のため、昨年夏から延期になりました。今日のように多くの講演者や聴衆を集めるのは、葉倬璋博士と彼のチームの努力は不可欠です。このシンポジウムに貢献したすべてのメンバーに拍手を送ります。このシンポジウムをオンライン化することで、世界中の人々が簡単にアクセスできるようになり、今日のテーマである「国境を越えた文化交流」にもつながります。本日のシンポジウムの講演者が発表するように、現代の言語発展、教育システム、大衆文化など、様々な分野で互いに学び合っています。日本と香港の間では、百年前からの知識

交換や、文化・言語・文学の交流が行われており、現在も続いています。今日の講演者たちも斬新な見地で発表してくださいましょうか。特にこれからの基調講演、黄英哲先生が過去二十年間の日本の学術視野についてのお話を伺いたいと思います。

本学は学生が国内外のネットワークを活用して、グローバルな視点を身につけるように努力しています。このシンポジウムもその通り、学術、社会、文化の間のコミュニケーションは目的の一つになります。そのため、学生コメンテーターの皆さんはチャンスを逃がさないように、ラウンドテーブルで意見を述べてください。お先に皆さんの情熱に溢れた議論に感謝いたします。

地理の距離はアイデアを共有することが妨げられない、言語も問題ではありません。今日のシンポジウムによって、過去から新たな可能性を発見、未来を見据える角度を変えられるように願っています。ありがとうございます。

葉倬璋博士

香港教育大学中国文学文化研究センター・センター長

ご挨拶

黄英哲先生、人文学院院長代行 古先生、発表者の先生各位、院生と参加者各位、おはようございます。

近年、東西問わずに香港は注目を集めています。実際、文学、言語、文化の面から考えれば、香港は忘れられたことが一度もないでしょう。我々は香港の大学にある研究センターとして、香港を議論する場所を作るのは目標であり、責任でもあります。本日のシンポジウムでは、発表の先生たちが約一世紀の歴史の旅をさせ、香港と日本の風景、さらに中国や日本の異なる文脈にある香港への記憶を見せ

られることになるだろう。非常に期待しています。午後のラウンドテーブル・セッションには、日本、中国本土、香港の若い研究者が集まり、香港研究についてコメントする予定です。素晴らしいアイデアを共有、有意義な議論を進めるように願っています。

今回のシンポジウムの準備は一年以上を掛りました。研究センターのメンバーたちの献身的な努力、人文学部のサポート、そして会議に参加してくださった先生の方々、また大学院生の皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございます。

シンポジウムの紹介

2021年5月21日、香港教育大学の人文学部と中国文学文化センターが主催する「香港言語と文学文化国際シンポジウム：日本と香港」は開催された。当初は2020年秋に開催される予定でしたが、コロナの感染拡大により数回延期され、結局として今年オンライン会議に伴い、オンライン生放送付きという形で実現された。会議の開催により、このような困難の状況で地域を越えた知識の交換ができ、それは参加者全員のサポートのおかげである。

シンポジウムは基調講演、文学文化セッション、言語文化セッション、そして最後のラウンドテーブルの4つのセッションで構成されている。人文学部の副学部長である谷名月博士と中国文学文化センターのセンター長である葉倬璋博士は開幕スピーチに、会議のコンセプトを説明し、学者や大学院生をご挨拶していた。

基調講演では、愛知大学の黄英哲教授は日本の学術界が香港の文化・文学への理解について説明した。黄教授は前世紀末の日本社会の香港に対する関心か

ら始まり、さまざまな著作、翻訳、講演、セミナーなどの例を挙げ、そしてこの二十年間の日本学界が香港への視線における変化を詳しく説明した。

文学文化セッションの司会を務めましたのは區仲桃博士である。四人の講演者は、日本から見た香港、香港から他者への視差に注目し、文学作品、文化現象、視覚芸術など、幅広いテーマを取り上げた。韓燕麗教授は第二次世界大戦中の日本の舞台劇における香港イメージに焦点を当て、新たな視点を紹介することによって香港内部にある既存言説を打破し、さらに多くの貴重なテキストや資料を展示した。雑賀広海博士は1960年代後半の香港左翼運動以降に制作された香港映画における中国の表現を検証し、身体や風景がいかにか戦略になることを論じた。黄淑嫻教授は也斯の日本に関わる作品を用いて、彼の旅行手記の意味と心理的变化を分析し、也斯の人文的な関心や世界観を解明した。陳智德博士は、1950年代後半に徐速の書かれた2つの小説を例にし、文学的・政治的な考察

による周辺記憶への対処法を説明した。言語文化セッションの司会を務めたのは銭志安博士である。四人の講演者が、広東語の発展史、使用現象、教育制度などにより、さまざまな角度から日本と香港の間に言語文化の交流を考察した。吉川雅之教授は、19世紀末に香港で出版された辞書や言語学習教材を調べたところ、これらの出版物は実は同時代の日本の学者に参照されたことがあるのを明らかにした。香港と日本の言語交流はまさに二世紀前に遡ることができる。片岡新博士は近年の香港と日本の言語交流に焦点を当て、日本語の言葉がどのように香港に紹介され、その意味がいかに変化し、さらに新しい意味が生じるのかを説明した。劉擇明博士は日本語の言葉が香港にての使用メカニズムを検証し、外国語がどのように変換されて広東語の言語文化の一部に置き換えられるかを示した。鈴木武生博士は香港、日本、台湾が本土の言語に対する考え方や定義を比較し、母語教育政策の方向性や可能性を探っていた。

午後の時間はラウンドテーブル・セッション、司会を務めたのは香港城市大学の林少陽教授である。大学院生のコメンテーターたちは午前中の発表についての感想を述べ、興味のある分野に対して質問しました。林教授は発表を要約した上で、発表者の発言またコメンテーターたちの質問に対して意見を述べた。活発な意見が飛び交い、視聴者からの質問も多く寄せられた。

今回のシンポジウムがオンラインで終了は残念ですが、コロナが早めに終息するのを祈り、今度香港教育大学のキャンパスで開催されるイベントで研究成果を共有できるように期待しております。

シンポジウム日程

時間	発表者	所属	題目
08:30-08:45	ご挨拶 谷明月博士、香港教育大学人文学院・副院長 葉倬璋博士、香港教育大学中国文学文化研究センター・センター長		
	基調講演 司会： 陳 國球教授 国立清華大学 中国文学系		
08:45-10:00	黄英哲教授	愛知大学 現代中国学部	過去20年間の日本学術界が香港の文化・文学に対する理解
	文学文化セッション 司会： 區仲桃博士 香港教育大学 文学・文化学系		
10:00-10:20	韓燕麗教授	東京大学 総合文化研究科	戦時中の日本の舞台作品における中国と香港
10:20-10:40	黄淑嫻教授	嶺南大学 中国語中国文学系	也斯と日本：『在京都火車站』から『尋路在京都』まで
10:40-11:00	雜賀広海博士	神戸学院大学／京都芸術大学・芸術学部	文化大革命後の香港左翼映画の戦略：『碧水寒山奪命金』の風景再現を例として
11:00-11:20	陳智德博士	香港教育大学 文学・文化学系	香港文学の「歴史的記憶」について
11:20-11:35	討論時間		
11:35-11:45	休憩		

<u>時間</u>	<u>発表者</u>	<u>所属</u>	<u>題目</u>
	語言文化セッション 司会: 錢志安博士 香港教育大学 言語学と現代言語学系		
11:45-12:05	吉川雅之教授	東京大学 総合文化研究科	一緒に歩く練習した日々：19世紀中頃の英語学習を振り返って
12:05-12:25	鈴木武生博士	早稲田大学 法学部／跡見学園女子大学 コミュニケーション文化学科	日本、台湾、香港における母語・方言の教育政策・実践の比較と今後の展望
12:25-12:45	片岡新博士	香港教育大学 言語学と現代言語学系	「香港式日本語」：日本と香港の文化交流から生まれたもの
12:45-13:05	劉擇明博士	香港教育大学 言語学と現代言語学系	香港の広東語による日本語固有名詞の発音
13:05-13:20	討論時間		
13:20-14:30	昼食休憩		
14:30-16:00	ラウンドテーブル 司会: 林少陽教授 香港城市大学 中国語文学・歴史学系		

講演規定

- 1 基調講演時間は発表・質疑応答を合わせて75分です。
- 2 文学文化セッションと言語文化セッションには、発表者一人当たりの発言時間は20分です。
- 3 文学文化セッションと言語文化セッションの最後には15分の討論時間があります。
- 4 ラウンドテーブルの討論時間は90分です。
- 5 ラウンドテーブルの冒頭で、学生コメンテーター一人あたりの発表時間は8分です。それ以降の議論はセッションの終わりまでです。

発表者及び題目

基調講演

司会

陳國球教授

国立清華大学 中国文学系

基調講演

題目

過去20年間の日本学术界が
香港の文化・文学に対する理解

発表者

黄英哲教授

愛知大学 現代中国学部

要旨

第二次世界大戦中、香港は日本軍に占領・統治されたことがある（1941年～1945年）。2017年、アン・ホイ監督の映画「明月幾時有」（原題）では、この時期の日本軍の残虐性と、それに対抗する香港ゲリラの勇敢さが描かれる。香港大学が2018年に実施した香港人の海外の国や地域に対する好感度に関する意見調査によると、日本政府に好感を持つ香港人は32.8%、年々増加に見える。近年、香港、中国、台湾、マカオなどの10カ国が日本人に対する好感度の調査によると、香港人が日本人に対する好感度は最も高く、総人口の68.1%を占め、それに対して反感を抱く人は5.8%に過ぎないことがわかった。

2017年の香港政府の統計によると、香港を訪れた外国人旅行者のうち、日本人は台湾（201万7,550人）、韓国（148万7,670人）に次いで3位（123万100人）となる。香港研究専門の日本学者である倉田徹氏は、最近までの香港は、透明性の高い政治・社会状況、公正なシステム、汚職が少ない、政治的危機の少な

いという理由で、東アジアにおける日本の貴重な友であると指摘する。なお、両地域は、少子高齢化問題、脱工業化、高度成長から安定成長への移行などの共通課題を抱えている。そのため、日本人はよく香港に好感を持ちになる。

筆者の調査によると、1940年代以降、日本のメディアや学者は香港の紹介や研究の著作を発表しつづけた。特に1984年の英中共同声明から1997年の香港返還の前後まで、香港問題に関する著作、割に歴史や政治に関わったものが数多く発表されていた。2002年以降、香港の社会運動が頻発により、日本は香港に関する出版物はさらに活発、多様化し、特に香港文化や文学研究についての著作はかなり増加にみえる。

今回の発表では、過去20年間における日本の学者が香港の文化や文学に対する理解の変化を整理しようとする。また、これらの言説の中に「香港の共同体」が存在する余地があるかを議論しようと考えている。

発表者及び題目

文学文化セッション

司会

區仲桃博士

香港教育大学 文学・文化学系

文学文化セッション

—— 題目 ——

戦時中の日本の舞台作品における中国香港

—— 発表者 ——

韓燕麗教授

東京大学 総合文化研究科

要旨

1917年に澤田正二郎氏らによって設立された「新国劇」は、常に男性中心の劇団であった。1931年以降、日本が戦時体制に入ってから、新国劇は戦争をテーマにした作品を演出し、好評を博していった。日本の演劇評論家の大笹吉雄氏が指摘した通り、新国劇が男性劇団という硬派のイメージは戦争時代に当てはまる。公演記録を見ると、1931年から1945年にかけて上演された戦争をテーマにした芝居には、「中国」「香港」

「中国人」という要素が多く見られた。それらの戦時中に度々再演された劇は、戦後ほとんど忘れられていた。文学や映画と比べれば、舞台演出の形式についての研究はかなり難しい。この発表はその際の演出を再現することを試し、戦時中の日本の舞台における中国と香港の表現を分析しようとする。

文学文化セッション

—— 題目 ——

也斯と日本：『在京都火車站』から
『尋路在京都』まで

—— 発表者 ——

黃淑嫻教授

嶺南大学 中国語中国文学系

要旨

也斯が他界した前に、私は《新果自然來》についての論文を書いたことがある。それは紀行から也斯がどのように1970年代の台湾を描いたのを議論した。それは也斯の最初の海外旅行であり、それから彼の文学と文化視野はどんどん広がっていく。この発表は也斯の紀行についての研究の引継ぎである。私は、也斯が日本を書くことは二つの時期が分けられると考える。まず第一期は1970年代、台湾と中国へ行った際に日本へ回ってみた。そのきっかけで、彼は新鮮で感動的な散文を残した。第二期は1997年頃、親しい日本の友人たちと

出合い、一緒に写真展や出版プロジェクトを立て、詩、小説、散文もたくさん書いて、也斯が一番好きな日本映画ももちろん作ったことがある。その間に、日本は変わった。香港も変わった。異なる香港の文脈の中で、也斯による紀行は記録や叙情の文章だけではなく、異国への旅を通じて自分の街を再考することでもある。本稿は二つの也斯の紀行を読み、文型を比較しながら、異なる香港の社会文化の文脈のなかで、民族主義の叫び声のなかで、返還の不安のなかで、也斯にとって日本が何を意味するかを検証しようとする。

文学文化セッション

—— 題目 ——

**文化大革命後の香港左翼映画の戦略：
『碧水寒山奪命金』の風景再現を例として**

—— 発表者 ——

雑賀広海博士

神戸学院大学／京都芸術大学・芸術学部

要旨

本発表は文化大革命後の香港の左翼映画に注目する。国民党を支持する右翼映画より、1966年から1976年までの歴史は中国共産党と密接した左派映画に大きな影響を与えた。左翼映画は中国共産党に中国大陸の山や川を利用したと批判される。一方、文化大革命の影響を受けた極左の過激な思想や運動、特に1967年の暴動は多くの香港市民に恐怖を与えた。このような社会状況のなかで、左翼系の映画会社は製作を自粛し、映画市場も縮小した。文化大革命以前は、左翼と右翼が対等に競い合い、時には協力し合った時代であるが、文化大革命以降、左翼系の映画は激減した。その代わりに、ショウ・ブラザーズやゴールデン・ハーベストなどの右翼系映画会社が1960年代半ばから国内外の映画市場を席卷するようになった。右翼系の武侠映画やカンフー映画のうち、特にキング・フー、チャン・チェー、ブルース・リーなどの俳優は海外でも大成功を収めた。そのため、これらの右派映画は香港映画として知られているが、それ以外ほとんど海外に紹介されなかった。香港映画史を討論する際に一面しか見られないことが多いため、異なる角度から見直すことは意義があると思う。

1978年に中国共産党が改革開放政策を打ち出してから、文化大革命中に控え目な左翼映画会社は右派に対抗するため

に新たな映画製作戦略を立った。それは中国大陸で撮影、目新しくも懐かしい風景で香港の人々にアピールするという戦略である。もともと中国共産党と繋がっていたため、左翼映画会社は右翼の方より簡単に大陸から撮影許可をもらえる。香港には存在しえない、中国本土にある雄大な自然風景は映画のポイントになる。左翼映画にとって、中国本土の風景は実は中国の表象である。この点について、ジョニー・トーは自分の監督デビュー作である『碧水寒山奪命金』（1980年）が、台湾や韓国で撮影された胡金銓の作品より優れていると考える。本稿は俳優と風景の構成、アクションシーン、また仏教のイメージという3つの問題において、両方の映画を比較して、『碧水寒山奪命金』の雄大な風景と比べて、俳優の自由と身体は制限されていることを示しようとする。

以上の考察を通して、本稿では香港映画の作家と呼ばれているジョニー・トーの映画スタイルを再評価することを試してみる。彼の監督作品を討論する際に、デビュー作が常に排除されている。しかし、実際の場所で撮影するという製作スタイルは最初の作品からも見られ、それは左翼の戦略の転用と考える。

文学文化セッション

—— 題目 ——

香港文学の「歴史的記憶」について

—— 発表者 ——

陳智德博士

香港教育大学 文学・文化学系

要旨

香港文学における「歴史的記憶」は文化的アイデンティティとイデオロギーに対する思考である。異なる時代の作家は時代の要請に応じて、「歴史的記憶」の追憶を文学の叙情に変換する同時に、「歴史的記憶」の脆弱や矛盾を感じ取り、別種の「歴史」と「感情」に対する瞑想に耽る。本稿は徐速(1924-1981)の『櫻子姑娘』、李碧華(1958-)の『胭脂扣』、また董啟章(1967-)の「永盛街興衰史」を例にして論じようとする。

発表者及び題目

言語文化セッション

司会

錢志安博士

香港教育大学 言語学と現代言語学系

言語文化セッション

—— 題目 ——

**一緒に歩く練習した日々：
19世紀中頃の英語学習を振り返って**

—— 発表者 ——

吉川雅之教授

東京大学 総合文化研究科

要旨

香港人と日本人の交流が活発化している現代社会では、香港の広東語の語彙体系が日本語の単語(=外来語)を借用するのは難解の現象ではないだろう。

しかし、香港と日本の間での言葉の借用は最近始まったことではない。19世紀半ば、香港が英国の支配下に入り、日本が江戸幕府の終わりを迎えたところで、新概念の言葉についての交流はすでに香港と日本の間で起こっていた。多くの単語を収録した大辞典である Wilhelm Lobscheid (1822-1893) の『英中辞典』

(1866年から69年まで香港で印刷された)は出版から約10年後、日本でも刻印版(「和漢」と呼ばれる)が出現した。この本に掲載されている言葉のフォームは、当時の日本語の語彙に大きな影響を与えた。つまり、香港で出版されたこの辞書は明治初期の日本語の新概念を形成したとわかる。

なお、香港と日本の言語交流は言葉の参考に限らず、英語の学習も繋がっている。福澤諭吉(1835~1901)の『増訂華英通語』(1860年)は日本にてよく知られている英語教科書である。それは実は福沢がアメリカで入手した英語教科書の改訂版であり、ふりがなを添えて出版されたものである。そして『華英通語』(協徳堂1855)は『増訂華英通語』の原書ということは調査によって判明された。これも香港と日本の言語交流の一例であろう。しかし、協徳堂が香港の書店だかとは不明である。本研究は香港で出版された『華英通語』(恒茂、1860年、恒茂はかつて西營盤であった書店)を『増訂華英通語』と比較しながら、19世紀の香港と日本の英語学習経験に注目し、両地の英語教科書の発音方法の共通点と相違点を検証しようとする。

言語文化セッション

題目

日本、台湾、香港における母語・方言の教育
政策・実践の比較と今後の展望

発表者

鈴木武生博士

早稲田大学 法学部／
跡見学園女子大学 コミュニケーション文化学科

要旨

「先住民族の権利に関する国際連合宣言」(2007年)や「ユネスコ危機言語地図」(2010年)は、言語研究者のみならず、国の言語教育に携わる多くの人々に深刻な影響を与えた。それは伝統的な言語遺産の保存・復元にも影響を与え、多くの国や地域で様々な問題を引き起こしている。日本、台湾、また香港も複数の方言(場合によっては異なる固有の言語も)が高低を区別せずに使用されていて、社会言語学のアプローチから見れば非常に複雑な環境である。今回の発表は以上の国・地域における言語教育政策と実際の社会言語状況を比較し、将来において多言語社会の可能性の地平を広げようとする。

言語文化セッション

—— 題目 ——

**「香港式日本語」：日本と香港の文化
交流から生まれたもの**

—— 発表者 ——

片岡新博士

香港教育大学 言語学と現代言語学系

要旨

歴史を振り返ると、日本文化は常に中国文化の影響を受け、日本語も中国から多くの言葉を借りていた。明治時代以降、日本が西洋文化を勉強するところで、概念に応じる日本語の訳語が存在しないため、中国語の形態素を借りて新造語を作った。そのような言葉は清朝末期また民国初期に日本に滞在した中国人留学生に持ち帰られ、現代中国語の重要な語彙の一部となった。

周佳榮 (2016) によると、例え、「銀行」(bank) は日本語から来た単語と考えられたが、実際には1866~1869年に香港でW.Lobscheidが出版した『英華字典』に収録されていて、日本語で出現するのはその後という。当時、香港には中国語で西洋文化を紹介する宣教師が多く、日本人はそれらの作品を参考して日本語の語彙を作ったのもおかしくない。それゆえ、新しい言葉の誕生は常に文化交流と密接するとわかる。

20世紀半ば以降、テレビドラマ、映画、漫画、音楽、雑誌などを通じて日本文化が香港に紹介され、結局として様々な日本語の言葉は香港に輸入されてきた。21世紀に入ると、多くの日本語の言葉は香港についての口語と文語で定着して独特な変化が見える。本レポートでは、日本と香港の文化交流の歴史を振り返った上で、「香港式日本語」の意味や文法の特徴を検証しようとする。

言語文化セッション

—— 題目 ——

香港の広東語による日本語固有名詞の発音

—— 発表者 ——

劉擇明博士

香港教育大学 言語学と現代言語学系

要旨

香港人にとって、日本は人気ある観光地であり、大事な大衆文化のもとでもある。漢字文化圏であるため、香港人は日本語ができるかに関わらず、日本の固有名詞（地名、人名、組織名）に親しんでいるだろう。本稿は広東語における日本の固有名詞の固定借用と臨時借用を検討し、香港の広東語使用者による日本の固有名詞の借用による問題点と対処法をまとめよとする。以上の問題、(a)広東語の内部問題（多音字、変調、下品な表現の回避）、(b)日本語の漢字問題（旧字体、新字体、和刻字）、(c)中国語ではない日本語の固有名詞の扱い、という3つの類型が分類できる。香港の広東語が日本の固有名詞に対する処理は、簡単

に言えば日本語の構成要素を広東語で読めるような漢字や英単語に変換することである。日本語の発音を無視できない場合は、日本語本来の音調に関わらず、外国語の借用語にはよくある6-1-4の音調のように使用することになる。このような対処法は日本語の知識に頼らず、日本語ができない香港人さえも広東語の文脈のなかで日本の人物や出来事を語りされ、香港においての日本文化の普及に貢献したと思う。

— ラウンドテーブル —

ラウンドテーブル・セックション

講演規則

- 1 ラウンドテーブル・セックションの討論時間は90分がある。
- 2 冒頭、学生コメンテーター一人あたりの発表時間は8分です。それ以降の議論はセッションの終わりまでです。
- 3 一般観衆はチャットルームで質問をあげることができます。発表者や学生コメンテーターは質問に答えます。状況によって回答されることもあります。

ラウンドテーブル・セクション

司会

林少陽教授

香港城市大学 中国語文学・歴史学系

学生コメンテーター

(お名前アルファベット順)

陳燕怡

香港教育大学 文学・文化学系

吳穎濤

大阪大学 言語文化研究科

徐雨霽

香港城市大学 中国語文学・歴史学系

周航屹

中国人民大学 新聞学院／愛知大学

陳燕怡

香港教育大学 文学・文化学系

博士課程在学

参加者の声

シンポジウムでは、陳智徳先生は南方に渡来した文人である徐速の『星星之火』（1952年）や『櫻子姑娘』（1960年）を例にして、歴史記憶を書くこと、また当時の自由文芸作品の政治性をめぐる議論について論じました。注目すべきは、陳先生は政治色が強いと言われる『星星之火』の再版から言いはじめ、1950年代半ばの台湾と香港の文芸の系譜と政治をめぐる議論を引き出しました。それは台湾と香港が1950～60年代の間に現代主義の対話に対する研究の一面であり、二つの地域の文芸交流における研究に新たな地平を開くことであります。私は特に興味が深い、さらに研究価値があると思うのは、日中戦争に生き残った徐がどのようにフィクションによって

個人経験を述べ、歴史を語ることです。本当に『櫻子姑娘』の序文に書かれたように「客観的、冷静なままで、個人的な感情を隠す」ができませんか。それに基づいて、1980-90年代の香港の作家の作品を読み、彼らがアウトサイダーとして歴史記述のなかで想像力を働かせたこと、（例えば、李碧華の『胭脂扣』（1985年）や董啟章の『永興街興亡史』（1995年）では、作家が歴史資料を記述材料として用い、想像とフィクションによる香港の歴史をたどり、愛情や女の幽霊や化け物の視点から都市や人々の記憶に介入）、このような記述は何の文芸意義があらましよう。

吳穎濤

大阪大学 言語文化研究科
博士課程在学

参加者の声

学生コメンテーターとしてシンポジウムに参加したことは、とても有意義な経験でした。シンポジウムは、黄英哲先生の基調講演で始まりました。黄先生は、中国近代史と台湾文学を専門とされています。台湾における魯迅の著作の普及と中国のディアスポラ知識人の歴史に関する研究は非常に魅力的で、私自身の研究プロジェクトにも強い影響を与えています。私自身の論文のテーマは、東アジアと中国語圏の文学における中国人移民の記述と表現についてであるので、中国のディアスポラ文学者の伝記に関する綿密な研究は、異なる背景を持つ人々の足跡や移動の経験を描く上で、非常に強力な枠組みを与えてくれました。

基調講演では、黄先生は日本における香港の文化・社会の研究に焦点を当てられました。一貫したスタイルで、詳細な文献レビューを行っています。その結果、2002年以降、香港におけるいくつかの社会運動の結果として、日本の香港研究の出版物は、特に香港の文化と文学の分野で、より活気に満ち、より多様化していることが示されました。黄教授は、香港には独自のクワイアネスがあり、それが中国の伝統を受け継ぎながらも、現代中国とは全く異なる姿を見せる文化を生み出していると述べています。董啓章の小説『地図集』の翻訳と関連

する学術活動のケーススタディでは、香港の作家が作品を書く際に政治的・イデオロギー的な圧力を受けにくいという点で、香港の文学が中国文学の分野でユニークな地位を占めていることを示しています。このようなユニークな立場にあるからこそ、少なくとも「香港的視点」と呼ばれる視点が存在し、中国現代文学の発展と代替的発展モデルの可能性を再検討することができるのではないのでしょうか。

基調講演以外では、陳智徳先生の講演が非常に魅力的でした。彼は、香港文学における歴史的記憶に焦点を当てました。陳先生によれば、植民地時代の香港で創作されたフィクション作品に示された歴史的記憶は、文化的アイデンティティとイデオロギーの反映を含んでいますという。彼の観察によれば、様々な時代の作家が、時代のニーズに応じて、歴史的記憶の追憶を文学的な叙情に変え、同時に歴史的記憶の断片化と矛盾を感じ取り、「歴史」と「情」（感情、情緒）に関するもう一つの瞑想を実現していることが示されました。陳先生が特に注目したのは、香港の作家である徐速（1924-1981）の1950年代から60年代にかけての著作です。徐速は、冷戦時代にイデオロギーのジレンマに陥り、「右派」の作家というレッテルを貼られることに苛立ちを感じていまし

たという。このような文明の衝突の時代に置かれた徐速は、世界の潮流の激変に対する自分の無力さを示す叙情的な文章に頼るのしかありません。

私は、歴史的記憶と個人的記憶の二項対立について少し論じた研究論文を書いたことがあります。個人の記憶は、歴史的な記憶にならない限りに忘れられやすいが、歴史的な記憶には集団性の特徴があり、個人の記憶を歪めてしまう可能性があります。実際、中国の叙情詩の現代性に関する王徳威教授の研究から、現代中国における叙情詩は、革命や啓蒙を追求

する文章に対抗するものであることがわかっています。中国の作家たちは、近代という進歩的なプロジェクトに参加できないとき、自分たちの失敗や初心を現すような「叙情」に頼ります。このような失敗の記録は、人々が何を期待し、なぜその期待が現実にならなかったのかという歴史を教えてくれます。徐速の小説、そして香港文学の集積を研究することは、「革命の歴史」や「好故事」といった壮大な物語に隠された無数のエピソードを理解するための重要な事例となりましょう。

徐雨霽

香港城市大学 中国語文学・歴史学系
博士課程在学

参加者の声

「香港言語・文学文化国際シンポジウム：日本と香港」の学生コメンテーターとして参加させていただき、ありがとうございました。私の博士課程の研究テーマとはあまり関係がありませんが、香港と日本の近代関係についての思考はアジア研究にとって注目すべきテーマに違いありません。それは中国／地域研究の重要課題だけではなく、グローバルな視点からの学術実践でもあります。「日本—台湾」の歴史関係、即ち50年の日本植民地としての歴史、あるいは香港のイギリス植民地時代のようによく研究されていました。それに対して、香港の日治時期の「3年8ヶ月」についての調査は最近始まったばかりそうです（例え、『坐困愁城：日佔香港的大眾生活』、『吞聲忍語：日治時期香港人的集體回憶』及『濁世消磨：日治時期香港人的休閒生活』など）。ですが、今回の会議を通じて勉強になりましたのは(1) 香港の

現代や当代文学が日本にての受容と翻訳、また香港の作家（也斯など）が日本について書くこと、(2) 戦時中の日本の舞台劇における香港や中国の表象、(3) 日本語が広東語の環境にての変形と使用現象、また逆も、以上のことです。私はもっとも興味を持つのは、もし日本現代の知識人（一般社会ではなく）は香港への関心が1997年の返還や近年の社会運動と繋がれば、その「関心」は自分自身に対応する物事があるだろう。文学、文化、さらに言語の面から見れば、香港と日本のつながりと交流は途切れたことがなく、今までも様々な形で互いに相手の認識に影響を与えています。日本と香港から始まるアジア地域間の共鳴は注目される価値があるはずです。それを私たちに注意させられることこそは今回の会議のイントではないでしょうか。

周航屹

中国人民大学・新聞学院／愛知大学・中国研究科
博士課程在学

参加者の声

香港教育大学が開催した「香港言語・文学文化国際シンポジウム：日本と香港」に参加したことで、かなり勉強になりました。感想について以下三つがあります。

1) 学術史の回顧の実演：黄英哲先生は基調講演の「過去20年間の日本学術界が香港の文化・文学に対する理解」で、香港に関する日本学術研究を回顧して、香港文学と文化への認識またその変化を明らかにしました。歴史を総合的な理解したことによって、シンポジウムのテーマの学術文脈を把握することででき、発表内容や討論をもっと容易に理解させていただきました。

2) 中国本土の経験の紹介： 今回のテーマは日本と香港の中心に展開されていますが、その間の文学や文化上の相互作用をよりうまく説明するため、中国本土（特に上海）の例が参考できると思います。例えば、香港文学が日本学術界の視点から見られることと、中国大陸の文学香港文学が日本学術界の視点から見られることは、なんの共通点あるいは相違点がありましようか。それはなんの原因がありましようか。さらに、日本について書かれた香港文学の作品は何の日本学者や作家から影響を受けたのでしょうか。上海を言えれば、小説家と新聞編集者の包天笑のことを思い出しました。包氏は上海から日本へ考察しに行き、1948年に台湾に渡り、そして香港にずっと定住しました。包氏を事例にすると、中国文学

文化における時間と場所の越境性、その変と不変を議論することができると思います。

3) 卑俗と風雅、文学-コミュニケーションの弁証：黄先生が正反対の概念を引用したことに気付きました。黄先生は研究者の金文京の「木魚書」を例に挙げ、中国本土では異端と扱われる大衆文学は植民地時代の香港の異形な文化状態を象徴すると考えました。そして、作家の董啟章によると、香港文学が商業主義、大衆文化や政治権力に侵食されずに、純粹性を今まで保つことができるという。その「純粹性」は多元、東西の価値や新旧の物事の共生、大衆主義の繁栄などを示します。金氏と董氏が「卑俗」に対する考えは正反対であり、後者は文学の「卑俗」な発信環境を無視しました。私は香港文学の純文学性と風雅さを否定するのではなく、ただ文学が必ず孤立の存在ではないということを強調したいと思います。もし、文学が作者の個人創作だけではなく、読者の参加も必要ということに同意すれば、文学作品は読者の頭に忍び込むのより、出版、印刷、流通、また閲読などのようなコミュニケーション過程が決して抜けられないことは間違いだろう。さらに、人間の社会関係とコミュニケーション過程と連動し、異なる文学のコミュニケーションは異なる社会関係を構築するのになります。そのようなプロセスから因子ひとつを抜けても予測不能になるだろう。香港文学でも例外ではありません。

蘇柳朱

東京大学 総合文化研究科
修士課程在学

参加者の声

こんにちは、蘇柳朱と申します。現在、東京大学大学院総合文化研究科在学、専攻は言語情報科学です。私は広西で育ち、現在はチワン族の言語と古代チワン族の文字を研究しています。

感想文を書かせていただき、研究センターに感謝します。言語学専攻の私は片岡先生が発表した香港や台湾などの地域における日本語の外来語の統計について、深い感銘を受けました。私、そして友人たちも香港は「親英」、台湾は「親日」と思い込み、台湾が日本語の言葉をたくさん借りたそうだと思っていました。しかし、台湾などの地域と比べて、まさに香港のニュースのほうが「放題」などの言葉をより頻繁に使用しています。今後の研究において、既成概念にとらわれず、物事を当たり前のようにならないように注意します。

それで、多くの食をテーマにした香港小説が日本語に翻訳されるという現象は取り上げられました。翻訳そのものは翻訳者自身が決めるものですが、社会背景や文化の違いにより、関心も多少ズレがあります。私たちにとって当たり前なこととしても、他の人にとって聞いたこともないということも十分ありましよう。そのため、相手の文化を積極的に学ぶことで、自分の文化をもっとうまくアピールすることができるのではないかと考えます。私は将来、日本でチワン語と文化を広めたいと思います。そのために日本の文化をより深く知ることが重要です。さらに、論文を書く、出版するときも、読者の気持ちに配慮すべき、関連知識を説明することが重要です。指導の吉川先生の教えを思い出しました。

発表してくださった先生たちが香港の言語と文化に対する熱意を感じて、私はチワン族の言語と文化の研究の道を歩む決意をより固めました。私も先生たちのような優秀な学者になれるように努力します。

黄冠翔博士

香港教育大学 文学・文化学系／香港教育大学 中国文学文化研究センター
博士研究員

参加者の声

司会、そして参加者皆さん、こんにちは。台湾からの黄冠翔と申します。現在香港教育大学に博士研究員を務めています。本日の発表が興味深い内容がたくさんあり、大変勉強になりました。特に黄英哲先生が日本における香港文学の研究概論、及び他の発表者が言及した香港文学の普及と翻訳の問題に対して、私は特別な文学史ケースを取り上げたいと思います。

台湾作家の邱永漢は、1948年の台湾独立運動に参加したことで政府に指名手配されたため、香港に亡命しました。1954年に日本に移住、1955年8月から11月にかけて「大衆文学」に『香港』を執筆、さらに日本文学賞のトップの一つである直木賞（第34回）を外国人作家として初めて受賞しました。1956年6月に近代生活社によって『香港』の単行本は出版されました。しかし、その後、邱はビジネスや起業に転じ、日本や台湾では「投資や経営の神様」と認識され、文学の貢献はあまり注目されていませんでした。

異例でありながら、1950年代の日本文学界は邱永漢と彼の作品をどのように捉えていたのでしょうか。これは当時の日本文学界がいかにかこのような外国人作家を受け入れたこと、また彼の小説を通して香港を認識することと繋がると思います。さらに、当時の日本社会はどのように香港のことを想像することにも関わりました。邱が台湾の出身、香港の経験、日本に受け入れられる過程、かつ文学賞を受賞したこと、それ以上のことは複雑な文学文化や東アジアの情勢、さらに香港文学についての越境と受容に関わるはずで、1980年代から1990年代にかけて、香港返還問題のきっかけで日本の学界には香港研究ブームが発生し、多くの研究書籍も出版されました。邱永漢の例は私たちに思考の切り口をくださり、日本文学と香港文学の文学交流史に対する討論を少なくとも1950年代までに前倒しすることができるだろう。これは興味深い研究テーマとなると思います。



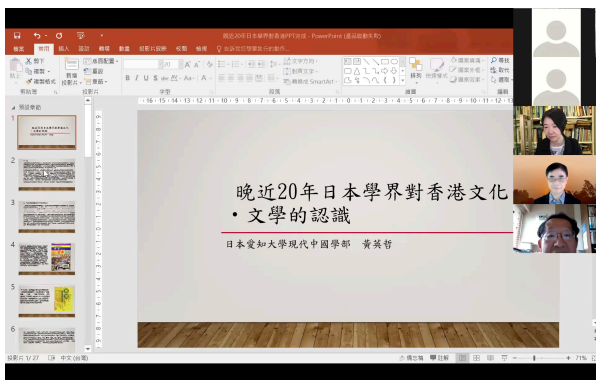
集合写真



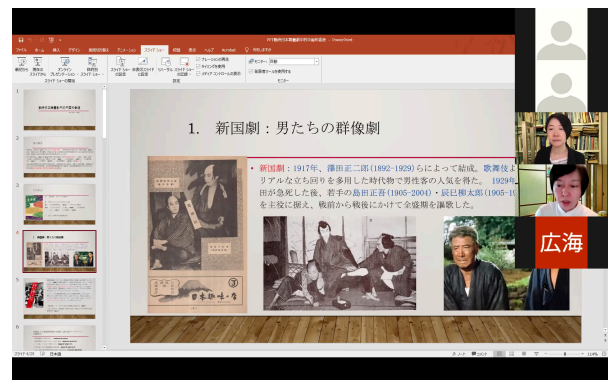
谷明月博士



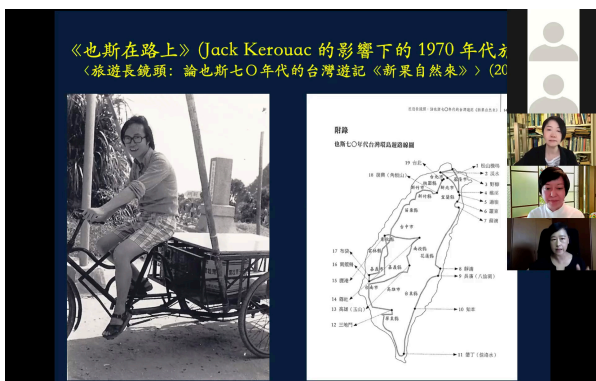
葉卓璋博士



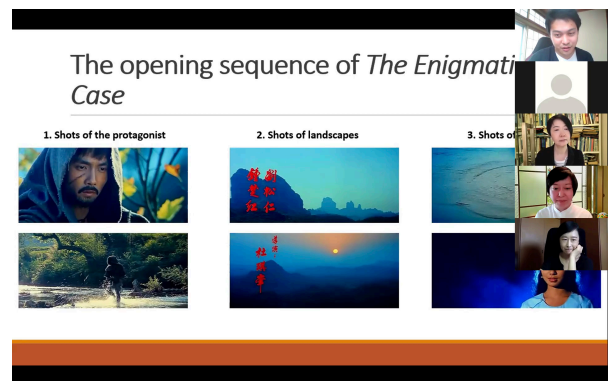
黃英哲教授



韓燕麗教授



黃淑嫻教授



雜賀廣海博士

一、引論

- 「難道讀者只有極左或極右的兩種人？人是不是為討好別人而活著呢？作品是不是尋著政客的眼色而下筆呢？」——徐達：〈關於「星之之火」〉（1958）
- 「我們都是被時代搵弄的倒寫鬼，……，忠於國家，國家違棄我們！忠於愛情，愛情毀滅我們！忠於真理，真理也欺騙我們！」——徐達：《櫻子姑娘》（1960）

陳智德博士

恒茂版《華英通語》

(美國)哈佛大學圖書館藏

吉川雅之教授

Examples of romanization systems

Genesis, Old Testament

Atayal romanization

鈴木武生博士

二人世界

- Japanese TV series “二人の世界”（竹脇無我、栗原小卷）
- The term “二人の世界” only refers to this series in Japan.
- Broadcast in the 1970's in Hong Kong
- “The world for two” represents the new type of family.

片岡新博士

問題提起

考察的緣起是日本歷史人物的讀法。

織田信長 在香港粵語一般讀作 *ziki tin seon3 zoeng2*，其中「長」字讀成「年的 *zoeng2*」，並非按日語原義推導出的「長短」的 *coeng4*。

可見香港粵語在處理日語專名時不一定照日語的原有用法，而是跟從粵語的內法則。

劉擇明博士

Roundtable

Duration: 14:30-16:00 (GMT+8)

Session Chair

林 少陽教授
香港城市大學中文及歷史學系
Prof. LIN, Shaoyang
Department of Chinese and History
The City University of Hong Kong

Student Commentators

- Ms. CHEN, Yan Yi (陳燕怡) Department of Li and Cultural Studies, The Education Uiver Hong Kong
- Ms. LIU, Miao (劉淼) Meiji University
- Mr. NG, Wing To Richard (吳國強) Graduate Language School of Language and Culture, University
- Ms. WANG, Xue Ju (王雪菊) School of Journalism and communication, Renmin University of China University
- Ms. XU, Yu Ji (徐荷蓀) Department of Chinese and History, City University of Hong Kong
- Mr. ZHOU, Hang Yi (周航毅) School of Journalism and communication, Renmin University of China/ Aichi University

Roundtable

Duration: 14:30-16:00 (GMT+8)

Session Chair

林 少陽教授
香港城市大學中文及歷史學系
Prof. LIN, Shaoyang
Department of Chinese and History
The City University of Hong Kong

Student Commentators

- Ms. CHEN, Yan Yi (陳燕怡) Department of Li and Cultural Studies, The Education Uiver Hong Kong
- Ms. LIU, Miao (劉淼) Meiji University
- Mr. NG, Wing To Richard (吳國強) Graduate Language School of Language and Culture, University
- Ms. WANG, Xue Ju (王雪菊) School of Journalism and communication, Renmin University of China University
- Ms. XU, Yu Ji (徐荷蓀) Department of Chinese and History, City University of Hong Kong
- Mr. ZHOU, Hang Yi (周航毅) School of Journalism and communication, Renmin University of China/ Aichi University

Roundtable

Duration: 14:30-16:00 (GMT+8)

Session Chair

林 少陽教授
香港城市大學中文及歷史學系
Prof. LIN, Shaoyang
Department of Chinese and History
The City University of Hong Kong

Student Commentators

- Ms. CHEN, Yan Yi (陳燕怡) Department of Li and Cultural Studies, The Education Uiver Hong Kong
- Ms. LIU, Miao (劉淼) Meiji University
- Mr. NG, Wing To Richard (吳國強) Graduate Language School of Language and Culture, University
- Ms. WANG, Xue Ju (王雪菊) School of Journalism and communication, Renmin University of China University
- Ms. XU, Yu Ji (徐荷蓀) Department of Chinese and History, City University of Hong Kong
- Mr. ZHOU, Hang Yi (周航毅) School of Journalism and communication, Renmin University of China/ Aichi University

ポスター



香港教育大學
The Education University
of Hong Kong

香港語言及文學文化
國際研討會：
International Symposium on Hong Kong
Language and Literary Culture:

日本 Japan and 與 香港 Hong Kong

▶ 聯絡電話
2948 7329 (Karma Kong)

▶ 聯絡電郵
konghp@eduhk.hk

▶ 聯絡地址
香港新界大埔露屏路10號，香港教育大學，
B3-G/F-02, 中國文學文化研究中心

主辦：人文學院、中國文學文化研究中心



FACULTY OF
HUMANITIES | 學人文
人脈弘遠, Humanity can broaden the Way

中國文學文化研究中心

21 2021
05

線上視像會議
09:00 - 17:30

【參加辦法】
有興趣參加旁聽的人士，請在4月23日前以電郵方式報名，電郵標題請注明「申請參加日本香港研討會2021」，隨信請附上姓名及聯絡電話，工作人員隨後會回覆確認。
此次會議將通過Zoom平台以線上視像會議方式舉辦，會議連結將在確認後傳送給報名者。

【簡介】
為促進香港語文和文學文化的研究，以及日本與香港之間的學術交流，本研討會邀請來自日本的學者與研究生蒞臨，與本地學術界分享研究成果。當日發表主要語言為普通話、粵語及英語，歡迎各界人士親臨旁聽。

【主題演講】
黃英哲 愛知大學 教授

【主題演講題目】
晚近20年日本學界
對香港文化・文學的認識

【部分與會者名單】
吉川雅之 東京大學 教授
韓燕麗 東京大學 教授



ポスター



香港語言及文學文化
國際研討會

日本 與 香港 2021



會議以線上形式舉行，當日將在Facebook及
Youtube上串流直播，詳情請留意本研究中心主
頁及活動專頁。



中國教育文化研究中心

21 2021
05

線上視像會議
08:30-16:00

〔主題演講〕
晚近20年日本學界
對香港文化・文學的認識
〔講者〕
黃英哲 教授 (愛知大學)

〔文學文化部分〕與會者名單：
韓燕麗 教授 (東京大學)
黃淑嫻 教授 (嶺南大學)
雜賀廣海 博士 (神戸學院大學、京都藝術大學)
陳智德 博士 (香港教育大學)

〔語言文化部分〕與會者名單：
吉川雅之 教授 (東京大學)
鈴木武生 博士 (早稻田大學、跡見學園女子大學)
片岡新 博士 (香港教育大學)
劉擇明 博士 (香港教育大學)



ポスター



香港教育大學
The Education University
of Hong Kong

香港語言及文學文化國際研討會

日本與香港

Introduction

This symposium aims to explore the singularities of Hong Kong culture from a cross-cultural perspective, which helps to provide a common ground for constructive discussions about linguistic and literature studies. By promoting inter-cultural communications amongst Hong Kong and Japanese researchers, it is expected to throw light on our understanding of Hong Kong culture.

In order to achieve this purpose, this symposium includes the following: Panel and Roundtable discussions. Postgraduate students from both Hong Kong and Japan are cordially invited to the Roundtable section.

Arrangement

Postgraduate participants are expected to share their views in the Roundtable in the form of 5-10 minutes presentations. You can prepare PowerPoint or handouts if necessary. A certificate of participation will be issued to all postgraduate student participants afterwards.

The quota is limited. All successful applicants will receive a notification through E-mail.

Application method

For those who are interested to attend the symposium, to register, please send mail to konghp@eduhk.hk entitled "Application of Japan/HK symposium 2021". Please also include your name, contact number, and a brief bibliography in the mail.

The symposium will take place as online mode with ZOOM. Meeting link will be sent to you after confirmation.

21 / 05
2021
Fri

09:00-17:30
Online video
conference

Application
Deadline

Mar 20, 2021

Contact Number: (+852) 2948 7329 (Karma Kong)

Contact Mail Address: konghp@eduhk.hk

Contact Address: RCCLLC, B3-G/F-02, The Education University of

Hong Kong, 10 Lo Ping Road, Tai Po, Hong Kong

Organizer: Faculty of Humanities; Research Centre for Chinese Literature and Literary Culture

International Symposium on Hong Kong Language and Literary Culture:
JAPAN & HONG KONG

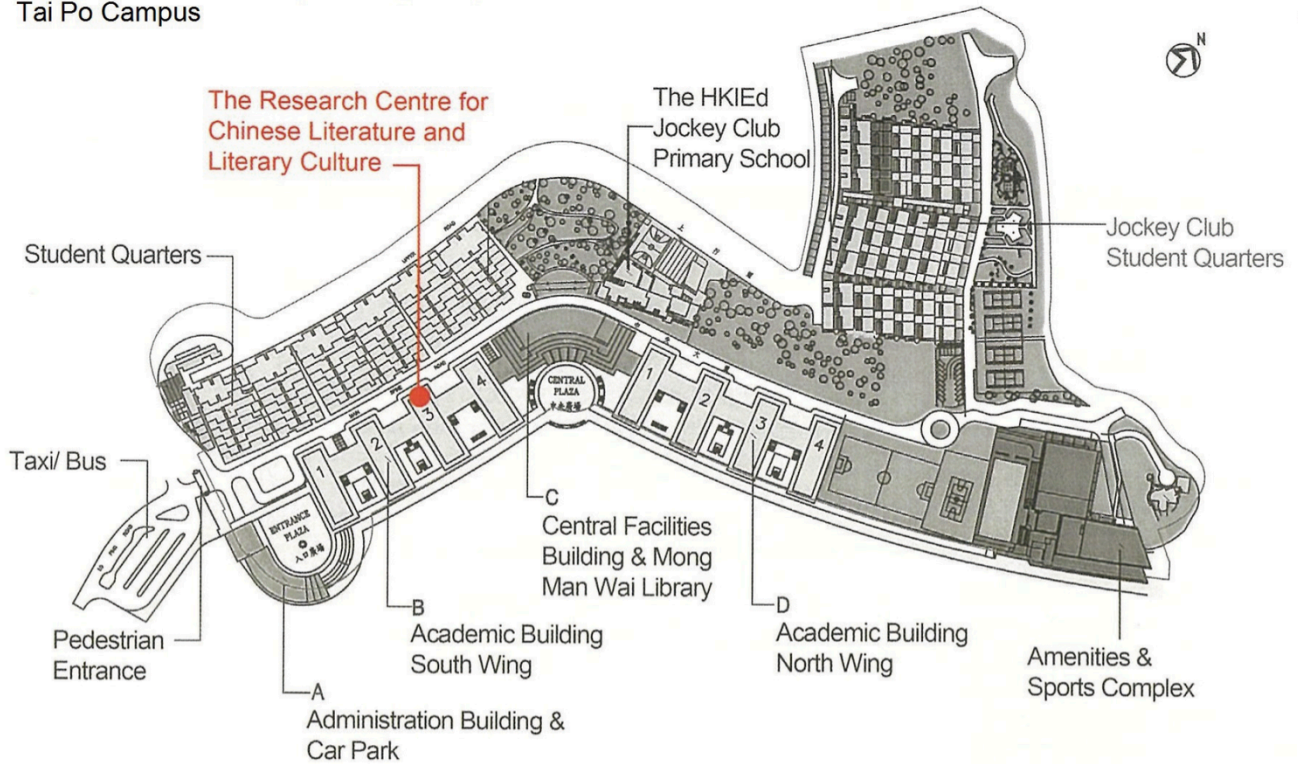


FACULTY OF HUMANITIES 學院文
人 兼 乎 道。 Humanity can broaden the Way

中國文化研究所

ABOUT RCCLC

The Education University of Hong Kong
Tai Po Campus



Contact Us

The Research Centre for Chinese Literature and Literary Culture

Enquiry Phone: (852) 2948-6554

Fax Number: (852) 2948-6199

Email: rccllc@eduhk.hk

Facebook: <http://facebook.com/eduhkrccllc>

Address: B3 - G/F - 02, The Education University of Hong Kong,
10 Lo Ping Road, Tai Po, Hong Kong

Service Hours: Mon - Fri: 08:30 - 12:00 & 13:00 - 17:20
(Sat, Sun and Public Holidays: Closed)



www.eduhk.hk/rccllc/

ACKNOWLEDGMENTS

Ms. CHEN, Yan Yi (陳燕怡)

Dr. HUANG, Guanxiang (黃冠翔)

Ms. LAI, Yu Man (賴宇曼)

Mr. LEE, Cheuk Yin (李卓賢)

Mr. LI, Chung Tai (李宗泰)

Mr. LOI, Ho Man (雷浩文)

Mr. NG, Wing To Richard (吳穎濤)

Ms. WONG, Miu In Henri (黃妙妍)

CONTACT PERSON

KONG, Hoi Pan Karma (江凱斌)

Research Assistant

Research Centre for Chinese Literature and Literary Culture

The Education University of Hong Kong

Tel: (852) 29487329

E-mail: konghp@eduhk.hk

Dr. YIP, Cheuk Wai (葉倬璋)

Director

Research Centre for Chinese Literature and Literary Culture

The Education University of Hong Kong

Tel: (852) 29487202

E-mail: chwaiyip@eduhk.hk